Niigata University

診断への応用に，若干の知見を得たので報告する．

【方法】新潟大学医歯学総合病院歯科において，2005年7月より8月までに，頸部郭清術により腫瘍（扁平上皮癌及び粘表皮癌）の頸部リンパ節転移が確定した頭頸部癌症例のうち，エラストグラフィーを利用し，病理組織像との対比が可能であった2症例について検討した．

【結果】病理組織像との比較検討の結果，転移陽性リンパ節は，エラストグラフィーでは概して青く描出されており，癌およびその周囲の組織の硬さを反映している可能性があると思われた．

また，転移の無いリンパ節は，比較的柔らかい組織として描出された．

【考察】エラストグラフィーにより，リンパ節の形態や内部構造のみでは判断できない転移リンパ節の診断において，有用な情報を得られる可能性が示唆された．今後は，従来のBモードおよびパワードプラー法を主体とした診断法に，エラストグラフィーを適切にくわえることで，より診断能が高まるものと思われ，今後の頭頸部領域の治療成績の向上に繋がることが期待される．

2 口腔癌頸部リンパ節転移の超音波所見 ― 画像上の経時的変化について ―

斎藤美紀子・林　孝文・平　周三
西山　秀昌・勝良　剛詞・新国　農
新潟大学大学院医歯学総合研究科
顎顔面放射線学分野

口腔癌に多い扁平上皮癌は高い確率でリンパ節転移をきたすため，リンパ節の経過観察が必要である．今回，US所見の経時的な変化が転移リンパ節の病理組織の変化を反映したと考えられた頸部リンパ節後発転移症例を2例経験したので報告する．

〔症例1〕76歳，女性．右側頬粘膜癌（扁平上皮癌T2N0M0）．USにて，顎下リンパ節の辺縁部に血流が検出されるようになり，中心壊死を疑う無エコー域も出現したため後発転移と診断．病理組織所見で辺縁部には肉芽反応が認められ，被膜が肥厚し血管増生がみとめられた．USでみられた血流は血管増生を反映したと考えられた．

〔症例2〕73歳，男性．左側頬粘膜癌（扁平上皮癌T4N0M0）．USにて，顎下リンパ節に高エコー域が出現し，拡大傾向にあったため，後発転移と診断．病理組織所見では，転移腫瘍組織は強い角化傾向を示していた．USでの高エコー域は角化物を反映したと考えられた．

3 耳下腺部類表皮嚢胞の画像所見

亀田　綾子・織田　隆昭・諏江美樹子
佐々木善彦・外山三智雄・羽山　和秀
土持　眞
日本歯科大学新潟歯学部歯科
放射線学講座

耳下腺部ではまれな類表皮嚢胞の画像所見を報告した．患者は29歳女性，右側耳下部の腫瘤を主訴として来院．右側耳下部に弾性硬，無痛性腫瘤を認め，耳下腺腫瘍の疑いで各種画像検査を行った．MRIでは境界明瞭，T1強調画像で筋肉と同程度，T2強調画像で脂肪よりも高信号強度，造影T1強調画像で辺縁のみ増強された．超音波検査では病変内部は充実性の所見を認めた．唾液腺シンチグラフィでは病変への集積はみられなかった．以上の所見から類皮，類表皮嚢胞または多形性腺腫を疑った．病理組織学的診断は類表皮嚢胞だった．本症例では内部性状の評価は超音波検査が有用であった．しかし内部充実性の所見は液体の貯留による嚢胞との鑑別を容易にしたが，逆に腫瘍性病変との鑑別を困難にした．

4 下肢CT angiographyにおける新たな試み：血管エコーによる血流計測に基づいての撮像

堀　祐郎・吉村　宣彦・笹井　啓資
木村　元政*
新潟大学医歯学総合病院放射線科
新潟大学保健学科*

【目的】下肢動脈CTA撮像時に，超音波パルスドプラ法にて流速を測定し，それに応じて撮像速

NII-Electronic Library Service

Niigata University

度を可変する方法を考案したので，その初期経験を報告する．

【方法】対象は閉塞性動脈疾患を疑われ下肢動脈CTAを撮像した7例．CTは16列MDCTを用いた．CTA撮像前にパルスドプラ法にて両側総大腿，膝窩動脈の平均流速を測定し，CTAの撮像速度を測定した中で最も遅い流速に合わせて撮像した．造影剤は300mgI/mlの造影剤を3ml/sで30ml注入，その後2ml/s, 6ml，1ml/s, 4mlと漸減し，3ml/s, 30mlで生食後押しした．Care Bolusを用いて，腹部大動脈でのCT値が120HU上昇後撮像開始した．腹部大動脈～膝窩動脈までの範囲で撮像開始から1秒毎のスライス位置で動脈にROIを設定し，1秒毎の動脈のCT値の変化を評価した．

【結果】パルスドプラ法により測定した流速は最遅部で39mm/s～80mm/sであり，撮像速度をそれに合わせた結果，撮像時間は13.82秒～28.16秒（平均17.06秒）であった．視覚的に静脈還流が見られた症例は無かった．1秒毎のCT値の変化は，ほぼ横這いだったのが5例，漸減したのが2例あった．撮像開始から10秒後までの平均の動脈のCT値は180～293.6HU（平均231.7HU）であり，体重と逆相関した（r＝0.804）．

【結論】パルスドプラ法により流速を測定し，それに応じて撮像速度を変化させる手法の初期経験を報告した．今後は，体重に応じた注入速度の変更や，注入持続時間の設定方法を更に検討する必要があると考えられた．

5　胎盤遺残の3例

根本　健夫・加村　　毅・高野　　徹
笹井　啓資・菊池　　朗*・田村　正毅*
高桑　好一*・田中　憲一*・尾崎　利郎**
谷　　由子**・山本　哲史***
新潟大学医学部放射線科
同　産婦人科*
長岡赤十字病院放射線科**
新潟労災病院放射線科***

〔症例1〕34歳，女性．分娩後に胎盤の大部分が遺残．MRIで子宮体部前壁にT2WIで高信号，早期濃染する6cm大の胎盤の遺残が確認された．子宮温存を希望しMTX点滴静注が施行され，胎盤の大部分が娩出された．

〔症例2〕25歳，女性．分娩後も性器出血が続いた．MRIでは子宮底部に5cm大の胎盤の遺残があり，周囲の筋層内には著明なflow voidが認められた．子宮温存を希望し両側子宮動脈塞栓術が施行された．治療後から性器出血は消失した．

〔症例3〕29歳，女性．産褥4日目に胎盤片を排出，大量の性器出血もあった．同日MRIでは胎盤の遺残は不明瞭であったが，子宮後壁筋層内に動静脈奇形を思わせる豊富なflow voidが存在した．その後は性器出血の量が減少したため保存的に経過観察された．1か月後のMRIでは小結節状の胎盤が遺残したが，子宮のflow voidは消失した．

【結語】性器出血を伴う症例でflow voidが目立つ傾向が見られた．

Ⅱ．特　別　講　演

1　動画と拡散強調画像を用いた最近のMRI診断

東海大学医学部
基盤診療学系画像診断学講師
高　原　太　郎

2　嚢胞性膵腫瘍の鑑別診断

浜松医科大学附属病院放射線部助教授
竹　原　康　雄

NII-Electronic Library Service